

博物学研究 その3

～重たい頭を支えた陶器のまくら～

川瀬 基弘

愛知みずほ大学人間科学部

1. 矢作川に眠る財宝

私は 10 年ほど前から矢作川の生物を調査しています。主な調査の対象は貝類です。河口付近ではアサリやシジミ、愛知みずほ大学周辺ではカワニナ、タニシ、ドブガイなどが生息しています。2008 年に本学より 5 km ほど上流域で、川の中に入り淡水貝を探していたところ、川底の砂礫に混じり陶器の破片が転がっているのを見つけました。水は透明で魚や川底の小石まではっきりと見えます。移動しながら引き続いて淡水貝を探していると、川底に転々とコバルトブルーに輝く陶器の破片が落ちています。最初は、周辺民家から投棄されたゴミだと思いましたが、点的に広範囲で見つかるので気になって拾い上げてみました。茶碗のかげらのようです。でもよく見ると、現代の茶碗とは明らかにどこかが異なります。また一つ拾い上げてみると、今度も茶碗のかげらです。骨董品に興味を持っていた私は、転がっている陶器片が江戸時代に焼かれたものではないかと思いました。矢作川の至る所で河床遺跡が存在することを知っていましたので、貝類調査を放り投げてしばらく陶器片集めに熱中しました。複数の破片を手にして観察すると、幕末から明治、大正あるいは昭和初期に焼かれた陶器であることがわかりました。その中に 1 点だけ茶碗の破片とは異なり、平らで角のある変な形をした陶器片を見つけました（図 1）。



図 1. 2. (上から順に図 1, 2 a, 2 b)

2. 思わぬ発見!

その変な形をした陶器片を研究室に持ち帰り、早速調べてみました。形に特徴があるため、すぐに「枕（まくら）」の破片であることがわかりました。まくら？陶器の枕？と、違和感をもつ方も多いかもしれませんが、矢作川で拾った陶器枕片とほぼ同時期に焼かれた同類の枕が図 2 に示すものです。同一のものに間違いありません。文献資料には「陶枕」と書かれています。これで「とうちん」と読みます。しかし、言われなければ枕とは思えないほど真四角で

す。仮に枕だとしても頭を載せるには硬くて痛そうです。やはり枕とは納得できずにもう少し調べてみました。すると、日本や中国ではいろいろな陶枕が使われていたことがわかりました。

「日本陶磁大辞典(角川書店)」によれば、陶枕は次のように解説されています。「陶磁製の枕。磁器のものは瓷枕ともいわれるが、陶器製か磁器製かにかかわらず、広く陶枕と呼ばれる。中国では七世紀ごろの唐時代より例があり、実用品として広く使用されていた。唐時代のもは小ぶりで、単純な箱形のものが多い。北宋時代になるとしだいに大形化し、豆形、動物形、如意頭形など、変化に富んだ多種多様な器形が現れた。日本には奈良時代に唐三彩の陶枕がもたらされている。平安時代には、猿投窯において陶枕がつくられている。(一部省略して引用)」。

3. 腕枕・脈枕・足枕・つの枕

抱き枕、足枕、首枕、腕枕、湯婆枕、つの枕、脈枕、腰枕、小枕など、用途によって様々な枕があります。例えば腕枕は、肘掛けのようなものであり、腕を休めるときに用いる枕のことです。現代では病院で注射をするときに腕をのせる枕もこう呼ばれているそうです。枕に関する書籍としては、白崎繁仁氏の「枕の博物誌(北海道新聞社)」に詳しいことが記されています。この書では、様々な枕の種類から、枕の移り変わり、構造と材質、語源など、詳細に記されていて、人間がなぜ枕を必要にするようになったのか、という項では興味深い考察がなされています。この書のなかでは、枕の構造と材質別に、詰め物枕、箱枕、組み木枕、網目枕、木枕、草枕、竹枕、土・石類の枕、動物性材料の枕、金属の枕などが紹介されています。

陶枕は、せともの枕、茶わん枕などと呼ばれ、江戸末期から明治にかけて多く焼かれるようになったようです。したがって、私の拾った陶枕の破片も江戸時代までさかのぼる可能性があり夢は膨らむばかりです。ただし、昭和の初期に陶枕が一時期大流行したので、そのころに焼かれたものかもしれません。

昭和初期に生産された陶枕(図3[次のページ写真8枚])は、歴史のある古い民家の蔵や倉庫に今でも眠っていることがあります。博物館などで展示されていることもあります。年配の方に、いくつかの陶枕(図3)をお見せしたところ、何人かの方から、「子供の頃に親が使っていたのを覚えている」とか「自宅の物置小屋でみたような・・・」という返事をいただきました。「初めてみた」とか「これ枕なの?」という回答も多くありました。

インターネットで陶枕を検索すると、今でもわず

かながら陶枕を製造している会社があることがわかりました。瀬戸市では、実用品というよりはインテリア雑貨として陶枕を販売しているところもあります。

4. 実際に頭をのせたら「イタイ」

図3[次のページ写真8枚]で紹介しました昭和初期の陶枕に、私自身も試しに自分の頭を載せてみました。ひんやりと夏は気持ちがいいのかもしれませんが、横に寝たら頭の重みで耳が痛いし、上向きに寝てもやはりゴツゴツして痛くて使いにくいというのが正直な感想です。クッション代わりにタオルでも巻けば良いのかもしれませんが。

インターネットの検索サイトを用いて、枕に関する情報をさらに集めようと考えました。実際に検索すると、安眠枕、磁気枕、健康枕などといった枕販売業者のホームページが目立ちます。値段は高いものでは数万円もします。テレビCMでも様々な高級枕が宣伝されています。人間工学や生理学の研究を重ねて設計された枕が使われる時代になりましたが、ちょっと前までは自家製の手作りが当たり前でした。この先、枕はどこまで進化するのでしょうか。

そんな時代の中で、陶枕は消えてしまうのでしょうか。矢作川河床に眠る大昔の歴史資料は、金銀財宝とは呼べないかもしれませんが、私たち人類の歴史や文化を知る上での貴重な宝物ではないでしょうか。

5. 参考文献

- 川瀬基弘(2003)猿投古窯の発展と灰釉陶器～“さなげもの”から“せともの”へ～. 名古屋地学, 65, 6-14.
- 川瀬基弘(2003)矢作橋付近の矢作川河床遺跡から出土した土器片. 矢作川研究, 7, 81-98.
- 名古屋市博物館(2000)川と遺跡. 名古屋市博物館.
- 檜崎彰一(1966)猿投窯 [陶器全集 31]. 平凡社, 東京都.
- 岡崎市教育委員会(1983)矢作川河床遺跡出土品展図録. 岡崎市教育委員会.
- 白崎繁仁(1995)枕の博物誌. 北海道新聞社, 北海道.
- 豊田市教育委員会(2000)集落遺跡の語る古代矢作川流域. 豊田市教育委員会.
- 矢部良明ほか(2002)角川 日本陶磁大辞典. 角川書店, 東京都.



